



①「ろくろ」という木製部品に、竹製の骨を一本一本、糸でつないで固定していく  
 ②和紙を張り付ける親骨48本に、それを支える48本の小骨を糸でつなぎ、開閉できる状態に  
 ③先の割れた和傘作り独特の道具、またペグを使い、竹骨を扶むようにつけて和紙を押しこめていく  
 ④少しづつ傘を開きながら、竹骨と竹骨との間に何度も指を滑り込ませて折り畳んでいく  
 ⑤防水が必要な和傘には油引きの作業。時間とともに和紙はじわじわと浸透するため、塗り加減はとても難しい

京和傘 日吉屋

京都市上京区の西陣の一角。京の町並みにしっとりとした和傘の街並みに「京和傘 日吉屋」はたたずむ。和傘作りをしている老舗は京都で今や日吉屋だけ。茶道家元や宮内庁の茶会で用いる大きな野点傘、番傘や蛇の目傘などの雨傘、歌舞伎や日舞で使われる舞傘など伝統の和傘を作ってきた。一方で、新しい発想を取り入れた商品作りも手がけ、国内だけでなく海外からも注目を浴びる。その工房をのぞいてみた。

(文・嶋田知加子、写真・柿平博文)

48本の竹骨を糸でつなぎ

今では全国に製造元は約10軒しかない。和傘を探すこと自体が難しくなっている。

「必要ないと思えば使わなくなるのは仕方ないと思う。ただ、知らないで必要ないというのなら、まずはどんなものかを知ってほしい」

5代目当主、西堀耕太郎さん(35)のそんな思いから始まったのが工房見学だ。

案内してくれたのは店舗2階の工房。床に敷いたゴザの上に座り、西堀さんは糸をより始めた。口で先を細くし、数本を絡ませ、ロウを塗る。針の穴に通すための地道な準備。和傘作りの本格作業はここからだ。「ろくろ」と呼ばれる部品に、大小各48本の竹骨を1本1本糸でつなぎ合わせていった。

「気の遠くなる作業でしょう」と西堀さん。骨組み作りが終われば、傘の大きさに合わせて和紙を裁断。自家製のりを作り、和紙を張り付けていく。天候によって竹や和紙の状態は変化する。のりの水分量や張り具合なども感じ取り微妙な

使われ続ける「JUNJUN」傘



和傘を開いた時に広がる美の世界は、傘を差した人だけが味わえるせいとなく空間だ

程は山ほどあった。

「和傘は骨の数だけ工程があるといわれます」と西堀さん。1本の和傘が10人以上の職人を経て、出来上がるまでに最低でも2、3週間。すべて手作業のため、ここでの工房見学はまさにそのとき進められている作業をじかに見学することになる。

もっと詳しく和傘のことが知りたいという方には体験工房がお勧め。「竹と和紙でできている和傘に親しんでもらい、心理的な垣根を低くしたい」。職人の丁

きた。

だが、和傘は衰退の一途をたどる。日吉屋も例外ではなかった。日吉屋は西堀さんの妻の実家。一時は廃業寸前だったが、和傘の渋さ、格好良さに惚れた西堀さんが枝を継いだ。

どうしたら使ってもらえるのか。インターネットで販売網を広げるなど、PRにも力を入れた。インテリアとしての利用も考えた。それが共同開発で商品化したランプシェード「古都里-KOTORI」。シンプルな傘と和紙から透けるかわらか

った。こんな日には、優しいふじ色をした絹張りの和日傘がよく似合う。透け感が実に美しく、女性を優雅に引き立てる。洋服にもずっと溶け込む和紙傘は大人のかわいらしさを、時には凛とした女性の美しさを引き出してくれる。開いた時の美しい幾何学模様は差した人だけが堪能できる芸術品。この世界を知らないなんてあまりにもったいない。

大人の社会見学

0123

■日吉屋 京都市上京区寺町546。「工房見学」は、5人で1人525円。所要時間制作中の傘の工程によって変わる。体験工房は、1人からみ1人4200円。所要時間ずれも要予約。土曜をのぞいて問い合わせは日吉屋(075-777-1111)

水「沢の井」をのぞく。(絵と文 伊奈吾)